

episode.02
硫黄島と共に生きる暮らし

話し手 観光ガイド・畜産業
とく だ かず よし
徳田 和良さん (昭和27年5月19日生)

聞き手 三島村立 三島硫黄島学園
7年
9年

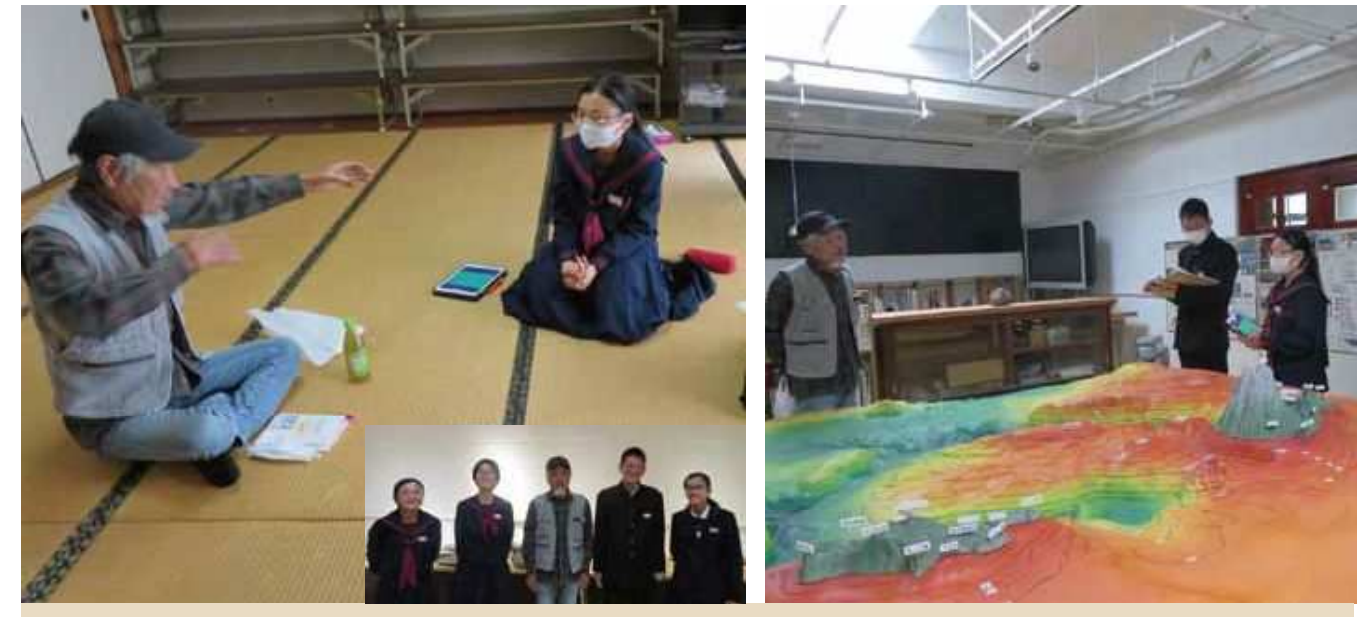
硫黄岳からの恵み

島に住んでいて、こんな不便で何もないところになんで住んでいるのか、と思うかもしれない。だけど、僕にしてみれば生まれて育った島だから都会に無いのがいっぱいあると思うんだ。まずはそれを、自分が楽しんで、そして伝えるって感じかな。だから、硫黄が出て鉱山があって、お父さん、お母さんがそこで一生懸命働いて、自分たちを育ててくれたと思えば、硫黄岳から受けた恵みに感謝したい。

硫黄採掘とは

硫黄の歴史について、記録的には1170年くらいに鹿児島島の領主がここに硫黄を取りに来ていた、と平家物語の中に残っているみたい。でも、実際はどうだったかは分からない。分かっているのは大体明治に入ってからみたい。ある時、従業員何十人かの会社を作ったみたいで、それが徐々に大きくなって行って、硫黄の需要が出てくるとこの硫黄岳も注目を浴びて鉱山となった。本格的になったのは、僕が小学5年生の頃が一番ピークだったかな。外からいっぱい働きに来る人がいて、今の硫黄島の人口は100人くらいだけど、その時は800人くらいから多い時には1,000人くらいになったと言われているよ。

硫黄岳の頂上が一番量が採れるので、最初の頃は歩いて行っていたみたいだけど、そのうち大きい鉱山になってきて、車も通れるように道路もちゃんと造っていったみたい。現場に行けば道路の跡とか採掘していた跡が残っているんだけど。車が通っていた頃は、硫黄岳の頂上からいわゆるロープウェイのようなものが索道に繋がっていて、それにバスケットのようなものがついていて、それに硫黄を入れて下に降ろしていた。その頃は車で降ろすということはしていなかったみたい。



硫黄からケイ石へ

硫黄の需要はだんだんと無くなっていった。石油を精製した後、他の成分が残るらしいんだ。それが硫黄の代用になるってこともあって、硫黄を採らなくなったんだ。一方で、硫黄岳では純度95%くらいのすごく品質のいいケイ石も採れていた。だから、昭和55年から南島オパールという会社を作って、正式にケイ石の採掘を始めた。ケイ石を山口県と新潟県の二箇所へここから高速船で運んで行ってた。工場に持って行って、それを外国に出して、外国でホワイトカーボンという製品にしてもらって、また日本に輸入していたみたい。それとアメリカのNASAの宇宙ロケットを飛ばすためのいろんな機械や、いわゆるICとか、ああいうのなんかもケイ石を使っていたみたい。だけど多くは家庭用の洗剤とかガラスとかセメントとかだけど。ケイ石の会社は大体15年くらい操業したのかな。僕はその中で10年勤めたんだけどね。

硫黄岳とどう付き合っていくか

難しいかもしれないけど、今はジオパークになったという観光的要素を、さらに強めていけばと思う。硫黄岳地熱発電も調査してもらったけど、発電するには温度が足りなかった。そういう意味では、まだなんらかの活用方法があるんじゃないかな。自然の恵みの温泉の今以上の活用とか、そういうものも考えていきたいね。

聞き書きコラム



硫黄島特製の線香花火

私たち三島硫黄島学園の後期課程生は、硫黄岳で採れる天然の硫黄、硫黄島の松で作った炭、長浜海岸で採った砂鉄を使い、様々な配合を試して線香花火を手作りした。使用している硫黄は、許可を得て、自ら硫黄岳に登り採集したもの。こんな貴重な体験をすることができるのは硫黄島ならではの経験。頭にヘルメット、顔にはガスマスクを着け、シャベルを片手に硫黄岳に登るのは、一つの冒険のようでとても楽しい。

三島硫黄島学園 7年 白石れもん